

# 日本学術振興会バンコク研究連絡センター

活動報告(2008年4月～6月)



## 在タイ科学技術関連機関による第1回科学技術連絡会開催

バンコクには、在タイ日本大使館をはじめ、独立行政法人、大学等の事務所が置かれているほか、JICA専門家等、複数の日本人がタイ側研究機関、大学等に派遣されており、それぞれの所掌において、科学技術に関連する業務に従事している。これまで、科学技術に関連する機関及び専門家間の連携は任意に図られてきたところであるが、今回、在タイ日本大使館岡部書記官の呼びかけにより、改めて情報交換・共有の場を提供することにより、機関及び専門家間での連携を強化し、将来的には、タイが直面する科学技術問題に協力して対処することを目標として、科学技術連絡会が設けられることとなった。

また、「自民党科学技術創造立国推進調査会は、同調査会の下部組織である科学技術国際戦略小委員会が作成した『科学技術創造立国としての国際戦略』を承認したところであり、今後、在外において、関係諸機関及び専門家が科学技術問題、我が国の科学技術の対外的PR等に一致協力して対処する必要性がますます高まると考えられ、外務本省では、現地科学技術タスク・フォース構想が検討されており、同構想が実現された際には、本連絡会をタスク・フォースに格上げすることを視野に入れている」という。

2008年6月20日、在タイ日本国大使館3階経済部会議室にて、大使館、各機関及び専門家の活動状況、外務省・大使館・JICAを通じた各種支援スキームの紹介、科学技術問題、日本の科学技術の対外的PR等に協力して対応するためのブレインストーミングなど事項に関する情報交換・共有をおこなうことを目的として、第1回科学技術連絡会が開催され、当センターからは池島センター長が出席し、JSPSのブローチャーを配布し、当センターの活動概要を説明した。

各メンバーの自己紹介と活動概要の説明後、連絡会の役割、地球規模課題に対応するODA、タイ科学技術週間への出展などについて意見交換がおこなわれた。その他、拠点(事務所)のステータス、駐在員の滞在ビザ、スタッフの雇用、税金の問題、事務所の法人格が認められない場合には、銀行口座の開設契約や事務所の賃貸契約がスムーズに進まない、研究器材の輸入に当たって、1年以内に持ち帰らないものについては関税の対象となる、などの拠点運営に関する問題点などが挙げられた。科学技術分野において日本のプレゼンスを高めるには、本邦大学に留学経験のあるタイ人留学生の活用を図ることも重要であり、帰国留学生の視点に立った同窓会組織の形成・運用が大切であるという意見も述べられた。

今後、原則として、3、6、9、12月の第3金曜日午前9時から大使館にて連絡会を開催していくこととなった。

#### 第1回科学技術連絡会出席者

1. 独立行政法人宇宙航空研究開発機構 (JAXA)  
齋藤尚樹 バンコク駐在員事務所長
2. 独立行政法人日本学術振興会 (JSPS)  
池島 耕 バンコク研究連絡センター長
3. 独立行政法人日本貿易振興機構 (JETRO)  
秦 茂則 バンコク事務所次長
4. 独立行政法人情報通信研究機構 (NICT)  
藤瀬雅行 アジア研究連携センター長
5. 東京工業大学バンコク拠点 北原 孝 特任教授
6. 大阪大学バンコク教育研究センター 関 達治 教授兼センター長
7. JAXA (UN - ESCAP) 阿久津亮夫 宇宙技術応用専門官
8. JAXA (AIT) 木部勢至朗 教授
9. 東京大学 (AIT) 田中伸治 客員講師
10. 慶應義塾大学 (AIT) 土本康生 客員助教授
11. タイ国立科学博物館 ガニガー・チェン課長
12. 日本大使館  
山田淳公使、石丸成人書記官、山本慎一郎書記官、岡部大介書記官

#### ARAT (Association of RONPAKU Alumni of Thailand) 会長訪問

2008年6月4日、タイ国論博同窓会長 Prof. Dr. YONGSMITH, Busaba を訪問し、タイ論博同窓会のこれまでの活動や JSPS の事業について意見交換をおこなった。

Prof. Dr. Busaba が所属している、カセサート大学理学部のスタッフの約7割が日本での留学・研究経験があり、日本人研究者との共同研究も活発におこなっている。タイでの研究助成は政府からの援助だけで、民間との共同開発、受託研究などはまだまだ少ない状況であるという。Prof. Dr. Busaba から、論博等の JSPS 事業経験者が、再度日本にて、当時の受入教員らと共同研究が再開できるようなフェロースhipの事業を展開してほしいとの要望があった。ARAT の幹部による ARAT のこれまでの活動及び今後の活動計画については下記のとおり。

名称：タイ国論博同窓会 ARAT (Association of RONPAKU Alumni of Thailand)

設立：2005年2月3日

論博事業経験者：172名

会員数：約 100 名

< 2005 年から 2007 年までの活動実績 >

セミナー、ワークショップ等の活動

1. 2005 年 12 月 20 日 (Windsor Suites, バンコク) JSPS/ARAT 共催  
JSPS セミナー “ TSUNAMI - Lessons Learned from the December 26th 2004 Tsunami and Preparation for the Future ” 開催
2. 2006 年 8 月 24 - 25 日 (バンコク) モンクット王工科大学 / ARAT 共催  
セミナー/ワークショップ “ Introducing to the Design, Fabrication and Application of Silicon Crystalline Solar Cells ”
3. 2006 年 9 月 12 日 (バンコク) NRCT/ARAT 共催  
パネルディスカッション “ Thailand-Japan Cooperation Program:JSPS RONPAKU (Dissertation PhD) Program on Country Development ”
4. 2007 年 2 月 28 日 (バンコク) JSPS / ARAT 共催  
JSPS セミナー “ Fundamentals and New Technology in Earthquake Engineering”  
“Development of S&T Community in Southeast Asia”

その他の活動

1. JSPS 米国同窓会へのメッセージ送付 (2007 年初頭)
2. JSPS Quarterly19 号 Message from Former JSPS Fellow (7)  
“Microbial biotechnology research in Japan paved my way to a professorship” by Prof. Dr. Busaba Yongsmith
3. 社団法人国際技術交流センター (JISTEC) 職員来訪
4. ARAT 会員による個別活動等
  - a) タイの農民コミュニティへの持続可能な農業のためのアドバイス
  - b) ワークショップ “ Small-Scale High Pressure Steam Distillator and its Application ”
  - c) ワークショップ “ Ant Museum of Thailand ”

2008 年 3 月 13 日に開催された ARAT 定期総会では約 30 人が出席し、以下の 5 つのアジェンダについて議論がなされた。

Agenda1：同窓会幹部会の選出

Prof. Dr. Busaba Yongsmith が会長として再任。

幹部会メンバー (任期：2 年 2008 ~ 2009 年)

会長：Prof. Dr. Busaba Yongsmith (カセサート大学)

副会長：Assoc. Prof. Dr. Somkiat Supadej (モンクット王工科大学)

幹部：Assoc.Prof.Dr.SongsriKulpreecha(チュラロンコン大学)

Dr.JirapornChaowarit (ランジット大学)

秘書：Dr. NuanjunWichukchinda (National institute of Health)

#### Agenda 2：ARATの強化

出席した会員全員が主に下記の3点について、ARATの活動強化をはかることに合意。

タイ国における論博同窓会の中心になること

タイと日本機関の関係の中心になること

国益のためなるような専門的集団の中心になること

ARATは非営利団体であり、幹部会員がARATをJSPSとNRCTの支援を通じて設置されたが、現時点では、ARATは事務所がないため、公式の組織とはなれない。しかしながら、ARATの活動を強化するために、公式な組織として開始できるようNRCTとJSPSから今後3年間の経済的支援が必要であると考えている。会員同士が交流を深める学術的な会議・活動に焦点をあてていきたい。論博同窓会は、タイや日本社会の利益のために、近い将来、さまざまな技術的な研究分野の独立したグループが一緒になった「統合プロジェクト」を実施できればと考えている。

#### Agenda3：2008年度の計画

下記の2つの活動を計画中である。

1．2008年10月開催予定の2008年NRCTの年次総会に参加。

- ・ 学術的な展示
- ・ 研究発表
- ・ 受賞者（ARAT会員）による特別講義

2．ARAT年次総会

（第7回JSPS - NRCT - ARAT Joint Meeting for RONPAKU Fellows）

#### Agenda4：今後の計画

1．2008年Thailand Research Expo (NRCT主催，Centara Hotel，バンコク)でのセミナー開催

“ Outstanding ARAT Members and Their Research Activities for the Sustainable Development of the Country ”

2．ARAT会員のCV収集

3．会員のためのニュースレターの発行

（論博同窓会員はさまざまな分野で、タイ国全土で研究しているため、会員が一度に集まることは難しいためニュースレター発行の着手が必要であると考えている。）

4．「統合プロジェクト」の実現

#### Agenda5 : その他

会員全体が NRCT に ARAT のオフィスアドレスをおくことを強く希望している。(一部の会員は JSPS におくことを提案)

論博メンバー間の「パイロットプロジェクト」

ARAT の活動のための民間企業等による寄付の受付

ARAT 会員の活発な活動

(参考)

第 1 回幹部会メンバー (2005 ~ 2007 年)

会長 : Prof. Dr. Busaba Yongsmith (カセサート大学)

副会長 : Assoc. Prof. Dr. Somkiat Supadej (モンクット王工科大学)

理事 : Assoc. Prof. Dr. Songsri Kulpreecha (チュラロンコン大学)

Dr. Jiraporn Chaowarit (ランジット大学)

Assoc. Prof. Dr. Saisamorn Lumyong (チェンマイ大学)

Assoc. Prof. Dr. Bupha Toparkngam (コンケン大学)

#### **マヒドン大学インターナショナルディ出席**

2008 年 6 月 20 日、マヒドン大学の留学生のための交流を目的としたイベントであるマヒドン大学のインターナショナルディに出席した。

マヒドン大学国際部長 (International Relation Division, Director) Boonyarat Suwanchida 女史に JSPS の事業説明及び当センターの活動を紹介し、日タイの学生交流、研究者交流について意見交換をおこなった。

#### **JSPS 事業経験者のネットワーク作りへ**

当センターは、これまでタイ国論博同窓会の活動など、論文博士事業経験者を中心とした事業経験者のネットワーク作りの支援をおこなってきた。しかし、タイには、外国人特別研究員事業経験者が 70 名を超え、現在、外国人特別研究員 (欧米短期、サマープログラムを除く) として日本に滞在しているタイ人研究者数は、中国、インド、韓国、バングラディッシュ、エジプト等について多く、昨今、外国人特別研究員に関する当センターへの照会も増えてきている。タイは、昭和 52 年度に「拠点大学交流」を本格的に開始して以来、学振事業では東南アジアにおける最大の、そして全世界でも指折りの交流対象国となっており、当センターでは、論博事業だけではなく、外国人特別研究員事業、招へい研究者事業 (「短期」及び「長期」) 等で来日した研究者の名簿を整備し、外国人特別研究員事業経験者やタイ国内の大学を定期的に訪問し、タイにおける新たな JSPS 事業経験者のネットワーク作りの礎を築きたいと考えている。

## JSPS事業経験者訪問

### チュラロンコン大学 (The Petroleum and Petrochemical College)

2008年6月25日、外国人特別研究員として、2005年5月から2006年11月まで奈良先端科学技術大学院大学にて研究に従事していた Dr. Boonyarach KITIYANA を訪問した。Dr. KITIYANA の日本での研究テーマは、「オレフィンの精密重合に高性能を発揮する担持型遷移金属錯体触媒の設計・創製」で、フェローシップ終了後は、チュラロンコン大学(The Petroleum and Petrochemical College)准教授の職についている。



オクラホマ大学で博士号を取得した Dr.KITIYANA は、アメリカは、研究室が広く、リラックスした雰囲気フレキシブルに研究ができるとし、一方、日本での研究環境については、研究設備は充実しているが、アメリカと比べて、研究室にいる時間が長くなると述べている。奈良先端大学院大学は、外国人研究者の受入が多く、国際化が進んでいる大学である印象を持っているが、外国人研究者用の宿舎に入居できず、民間アパートを探さなければならなかった苦労もあったと話す。タイと日本の研究環境の比較の一例に、タイと日本国内の研究に関する予算が、タイ国の予算よりも多いことをあげた。

Dr.KITIYANA によると、JSPS の知名度は、タイではあまり高くなく、チュラロンコン大学の教員でも知らない人は多いという。

Dr.KITIYANAが所属しているThe Petroleum and Petrochemical Collegeは、チュラロンコン大学の大学院のひとつであるが、1993年にUSAID（アメリカ国際開発庁）の提唱により設立されたという。2006年のタイ高等教育委員会による大学ランキングでは、科学（Science）研究部門で1位にランクされるなど、高い評価を受けている。授業は英語でおこなわれるインターナショナルプログラムで、会議をはじめ、大学内の簡単な掲示物や案内も英語が使用されている。図書室の一角にビデオコーナーがあり、英語の授業についていけない学生は、ビデオ撮影された授業をみて復習することができる。タイ人の他に、



ベトナム人、ミャンマー人、インド人、ヨーロッパの大学院学生が在籍しているという。日本の大学を卒業しているスタッフも在籍し、東京理科大学、関西大学、京都大学等との協定を結び、日本の大学との交流が盛んであり、訪問日当日も出張中の日本人研究者とお会いすることができた。



最後に、「JSPS フェローシップのもとに、日本で学んだことは非常に多く、タイ国内で同じ経験をもった研究者と知合いになる機会がこれまでなかったので、是非、事業経験者間での情報

共有や意見交換をおこない」と、Dr.KITIYANA は、論博同窓会だけでなく、タイ国内で外国人特別研究員事業者を対象にした同窓会が形成されることを希望していた。

### JSPS事業経験者訪問 シーナカリンウィロート大学医学部

2008年6月27日、シーナカリンウィロート大学へ Dr.Hataitip TRISOMBOON を訪問した。Dr.TRISOMBOON は、外国人特別研究員として、2005年11月から2年間、東京農工大学にて、新しい避妊法による野生霊長調節法の開発に関する研究をおこなった。

博士課程在学時に、半年間の日本留学経験がきっかけで、外国人特別研究員事業に申請するに至り、2回目の申請で採用にされた。日本の指導教員や日本人研究者から、研究課題の設定から計画の立て方、実験器具の取り扱い方などのいろいろな技術まで、教えてもらった。もし、日本に行かなかったら、いまの研究者としての自分はないであろうと述べている。

Dr.TRISOMBOON が所属しているシーナカリンウィロート大学医学部生理学科は、12名の教員のうち11名が女性である。タイと異なり、日本における女性の仕事の地位 ( position of work ) が低いという印象を受けたと、Dr.TRISOMBOON は話す。



## ERIA 東アジア・アセアン経済研究センター (ERIA) 設立総会開催

2007年11月にシンガポールにて開かれた第3回東アジアサミットで、東アジア・ASEAN経済研究センター(ERIA)の設立への合意がなされていたところであるが、ERIA設立総会が、2008年6月3日にASEAN事務局(インドネシア・ジャカルタ)で開催された。

ERIA Governing Boardは、ERIAの最高意思決定機関であり、ASEAN事務局長と経済、学術、政策などの様々なバックグラウンドを持った東アジア16カ国から指名された理事で構成され、その中からベトナムのDr. Dinh Van An(理事長、ベトナム経済経営中央研究所)が事務局長に選出された。

ERIAはASEANと東アジア地域全体の協力、協調、発展のための強固な礎となり、経済統合に貢献をすることが期待されている。ERIAでは、政策分析を通じ、政策立案者、研究者、企業間に相互作用できるような政策提言をおこない、特に開発途上国への政策立案能力を改善することにつとめたいとしている。

福田内閣総理大臣は、「ERIAが将来、OECDと同様の役割をになう機構となることを目指しています。」と、東京で発言している。ASEAN事務局長の、Dr.SurinPitsuwanは、「ERIAはこの地域の政策経験を共有し、共通の課題への答えを模索し、優れた実践に向けた政策立案者への戦略的な研究支援を提供する。」と述べている。甘利経済大臣は、「ERIAがこの地域の『Center of Excellence』として産官学の英知を結集し、今後、アセアン及び

東アジアの経済や環境分野での共同体構築に向け大きく貢献してほしい」と期待の言葉をのべた。

(ASEAN事務局、2008年6月3日プレスリリース・原文英語)

## より多くの研究者を求めて ~ BIOTEC 新事務局長就任

タイ国遺伝子工学バイオテクノロジーセンター(BIOTEC)は、国内研究者同士の協力が、タイ国研究データベースを改良し、国内のバイオテクノロジー部門を改善すると述べている。

新しくBIOTECの事務局長に任命されたDr. Kanyawim Kirtikaraは、BIOTECの研究は、研究者不足のため、研究の進度が遅いと述べている。

Dr Dnyawimは、各々の研究者が特定のフィールドに焦点をあてるには、時間と労力と専門的な科学知識を要すると述べている。

「BIOTECには、約350人の非常に少ないスタッフのため、センターは国家の情報提供機関として役割を改善するためには、国内と地域の民間の研究者たちと協力しあうべきであろう。」とDr Dnyawimは付け加える。

Dr Dnyawimは、経済成長を支援するためには、商業化が可能な植物開発と家畜育種を、BIOTECのタスクとして焦点をあてていることを強調している。

また、BIOTECは、環境を保護する手段として、生物医学の手法の研究や、バイオテクノロジーについて研究する必要がある、「タイは農業国であり、米、キャッサバ、ヤシなどの作物を改良するのは、私たちの責任です。」



と Dr Dnyawim は述べる。さらに、

「われわれは、生体内変化の研究を続け、鳥インフルエンザやマラリアがどのようにおきるか、その対処法、処置法を研究し続ける必要があります。」

「遺伝子開発等の研究を通じて、米や海老、キャッサバの遺伝子を改良することを促進し、われわれが生産性を高めるために農民を支援できるであろう」と述べる。

Dr Dnyawim は、食料、飼料、燃料配分が懸念されるようになり、代替エネルギーとしてのバイオマス開発のために、BIOTEDC の役割が拡大されたとしている。

Dr Dnyawim は、1998 年に生化学的定量（バイオアッセイ）のラボに研究者として BIOTEC に入所し、2005 年には中央研究ユニット長となり、2007 年後半に、キャパシティー・ビルディングの担当として、副事務局長となった。Dr Dnyawim は米国・コネティカット大学で Genetics の博士号を取得。テネシー大学医学部でのポストドク時代は、プロスタグランジンの合成にかかわる遺伝子の複雑性に焦点をあてている。

(Bangkok Post・2008 年 5 月 26 日)

### **タイの国際競争力 インフラ分野の改善が必要**

スイスの国際経営開発研究所（IMD）発表の「2008 年各国・地域の国際競争力ランキング」で、タイは 55 か国中昨年度の 33 位から 27 位へとランクを上昇させた。「マクロ経済」（12 位）「政府の効率」（22 位）「ビジネスの効率性」（25 位）などが全体の順位を押し上げているものの、「インフラ」（39 位）の分

野は弱く、特に科学インフラ（research and development spending as a percentage of the GDP）は 51 位で、IMD はタイのインフラ分野の改善が必要であると分析している。

(Bangkok Post, The Nation・5 月 19 日)

### **新型インフルエンザ H5N1 ウィルスのワクチンを開発**

タイの研究者のチームは、新型インフルエンザ H5N1 ウィルスの系統間交雑を防ぐために、新しいワクチンを開発している。

マヒドン大学 Siriraj 病院、タマサート大学 応用健康科学部、カセサート大学とタイ研究基金（Thai Research Fund）との共同研究でおこなわれている。

「この新しいワクチンは、系統間交雑から発生するウィルスから人間への感染を防ぐ、主要な薬となるであろう。」と、Kanyarat Teunginn 研究員は述べている。

(The Nation・2008 年 4 月 18 日)

### **海外のタイ人研究者と国内研究者の協力**

科学省は海外に住んでいる Thai professional association の科学技術資源を共有し、開発計画における知識転移を可能にするために米国、カナダ、日本、ヨーロッパ、オーストラリアで暮らしているタイ人研究者と協力することとなった。タイ国科学技術開発庁（NSTDA）、Thailand Research Fund (TRF)、高等教育委員会は Thai professional association と共に、技術移転を可能にする基盤の構築に取り組んでいる。

Wutthipong Chaisang 科学技術大臣は、これらの協力を通じて、科学技術の分野で研究している国内の研究者へ、海外で同じ分野で研究しているタイ研究者と発展を共有し、専門的知識を交換する機会を提供することになるであろうと述べている。

海外を拠点としているタイ人がタイへ帰るよう奨励するような、逆の頭脳流出を引き起こすことに焦点をあてるかわりに、科学省の方向性の転換が、海外にいるタイ人研究者が海外に残っていても、タイ国の開発に貢献することを可能にするであろう、と Wutthipong 大臣は述べている。

現在、タイ国内の研究者と専門的知識を教習したいと考えている、科学技術に関する経歴をもつ研究者は、1,000 人から 2,000 人にのぼる。

今週のはじめに、タイ国科学技術開発庁 (NSTDA) Thailand Research Fund(TRF)、高等教育委員会は会議を開き、このプロジェクトについて議論した。会議では、共同研究・開発をおこなう分野 (薬、バイオテクノロジー、エネルギー、環境) が決まったと、NTSDA Sirirung Songsivilai 副長官が述べている。

Sirirung Songsivilai 副長官は、タイ国は食物が重要な輸出産業であるため、このプロジェクトは、食物の安全性手段を発展させることにつながるであろうと述べている。政府は、代替エネルギー源の開発を検討し、風力とバイオ燃料の研究に着手しているため、エネルギーもまた、注目すべき重要な研究分野である、と副長官は述べている。

Sirirung 副長官は、少なくとも 4~5 の共同プロジェクトが、今年の会議からはじまってほしいと、感想を述べる。

このプロジェクトは、タイ国を海外との技

術開発を保ち、当該分野で進歩する一助となるであろうと、述べている。

また、研究だけではなく、このプロジェクトは、短い研修コースの企画を含むことになり、高等教育委員会は、研修コースのために 900 万バーツの予算措置をし、大学生への研修目的として、タイの専門家を招へいする。

Thai professional association (アメリカ・カナダ) の Chokchai Leangsuksan 理事長は、この科学省の動きが、タイ国の科学技術界に貢献するであろうと述べた。また、高性能コンピューティングとグリッドコンピューティング技術の分野での知識移転も計画中である。

技術が学術、経済の分野で重要な役割を果たすので、国内の研究者が新しい動きに追いついていくことを助ける必要性があると、Chokchai 理事長は述べている。

(The Nation ・ 2008 年 6 月 5 日)

### 大学入試システムが変更

「The central university admission scoring system(中央大学入試システム)」は、2010 年に、学業成績換算評点(GPAX)と Ordinary National Educational Test(O-ネット)結果に、適性検査を 50 パーセント追加する変更をする予定である。

大学学長会議が、2010 年の制度変更への調整にむけて、ウボン・ラチャタニーで開催された。学長会議は、GPAX と O-ネットの結果のうち、主要 8 科目の比重を 50 パーセントまで増やすことに同意した。数学、科学、工学、構造を含む基本的な科目の適性検査で、50%のスコアの残りを補うことになる。

現在、O-ネットと Advanced National

Educational Test(A-ネット)は、大学入学基準の70%を占め、学業成績換算評点(GPA)とGPAXスコアは残りの30%に考慮される。

また、大学学長会議は、Educational Testing Services(Niets)を、今後おこなわれるすべてのテストに責任をもつ国の機関とすることに同意し、大学の学位の質に関する問題もまた議論された。

ナレスワン大学の学長であり、大学学長会議の会長である Monthon Sa-nguansermser氏は、大学が短い準備期間で急いで新コースを設けてきたことは、大学教育の質に影響してきたと述べている。

大学の質の低下等の問題に取り組むために、大学の新コース(学部等)の導入時には、専門家を雇用する必要があると指摘している。

(Bangkok Post・2008年5月5日)

### 宇宙での米作り NSTDA と JAXA の連携プロジェクト

タイは多くの国に研究開発でまだ後れを取っている。IMD World Competitiveness Yearbook2007によると、タイが2005年にGDP(国民総生産)のたった0.24パーセントしか研究開発に投じられていないことが、明らかになっている。マレーシアは(GDP比で)タイの2.5倍、台湾、韓国、米国、日本は少なくとも10倍の研究開発費がつけられている。

しかし、驚くべき達成可能な研究計画がある。タイ国科学技術開発庁(NSTDA)が宇宙航空研究開発機構(JAXA)の協力のもとに、宇宙で米を作るために実験に取り組んでいる。

実験は現在、地上のタイ国科学技術開発庁

(NSTDA)のBIOTECの実験室内でおこなわれていて、JAXAが現在おこなわれている研究の結果を認めた場合、タイ米を育てるプロジェクトは、2010年の「希望」での宇宙空間の実験に選ばれるであろうとBIOTECのディレクターDr. Morakotは話す。

「無重力実験を通じて、より品質の良い、より生産性の高くなるような、米の品種改良に役立てたい。」とNSTDAのSakarindr Bhumiratana 長官は話す。これはJAXAとNSTDAとの覚書により結ばれた研究計画である。

タイ日の共同研究のプロジェクトリーダーである、Swat Tantiphawadi氏は、「研究チームは、人工環境下で育つ植物を開発して、組織培養より育てられた植物の成長について調べようとしている」と話す。このプロジェクトを通じて、宇宙で食物を耕作する革新的なメソッドが開発されることを望んでいる。

この実験を担当しているSuriyan博士は、「タイ人の科学者は有能であるが、最終的に重要なことは、科学者が利用者のためにどのように研究成果を適用するかだ。」と話す。農業者、農業専門家、研究者と農家、産業工場などの受益者の間には、ギャップがあるとSuriyan博士は主張する。さらに、国際的な科学コミュニティで有名になっても、研究者の知識が祖国(タイ)の実用に応用されなければ、タイ国内では有名にはならないだろうと付言している。

(Bangkok Post・2008年5月20日、The Nation・2008年5月27日)

### 大学が代替エネルギー使用の実験台

バンコク大学は、「グリーン・キャンパス」を目指して、タイ国科学技術開発庁(NSTDA)と協力して、キャンパスで使用されるバイオディーゼル生産に用いるエネルギーを発生させる太陽電池技術導入のパイロットテストをおこなった。

太陽電池の技術的開発は、タイ国科学技術開発庁(NSTDA)のSolar Energy Technology Development Institute (Solartec)の調査チームによりおこなわれ、研究チームは、電気と温水を作り出すための太陽エネルギーを利用する Photovoltaic/Thermal Solar System (PVT)を開発した。

このプロジェクトでは、Solartec は 12 個の PVT パネルをバンコク大学内のバイオディーゼルプラントに導入し、1 日あたりおよそ 2.5 ユニットの電力と 750 リットルの温水を発生させるという。

Solartec の Chatree Tangamatakul 主席研究員は、大学のバイオディーゼルプラントを運営するために、ソーラー技術からのエネルギーを使用することである述べる。

また、タイ国内のソーラー技術を、広範囲で使用できるようにするため、Solartec は地元の太陽電池メーカーと共同で、Solartec のテクノロジーソリューションを使用するソーラー・パネルを生産するためにプラントを設立する計画をたてている。

タイ国科学技術開発庁(NSTDA)は、メーカーと交渉しており、早急に話がまとまることを望んでいる。

新しいプラントに(予定されている)投資額は、400 から 500 million パーツほどであるが、プラントは、1 年あたり 10 メガワットの生産能力があり、5 年以内に損益分岐点に達する

と予想される。

(The Nation・2008 年 5 月 19 日)

### 大学が地方観光業の支援へ

コンケン大学が、文化アトラクションを促進し、観光業を盛り立てることにより、東北州のビジネスモデルを展開しようとしている。この研究は、観光客増をねらった関係機関へ情報提供される。観光客が少ないのは、東北地方で、通常、観光客は南部、東部、北部へ足を運ぶ傾向がある。

「文化アトラクション等のスタンダードの向上は、観光客をひきつけるためだけではなく、地域住民に、より多くの収入をもたらすことになる。」と、コンケン大学の Tirashaya 教授は述べている。

(The Nation・2008 年 6 月 24 日)

#### 4月

- 4月4日 京都大学東南アジア研究所バンコク連絡事務所打ち合わせ（センター長）
- 4月17日 角田副センター長着任
- 4月18日 NRCT 訪問・打ち合わせ（センター長、副センター長）
- 4月21日 国際交流基金訪問（センター長、副センター長）
- 4月21日～25日 センター長一時帰国（センター長会議出席のため）
- 4月23日 在タイ日本大使館 石丸書記官訪問（副センター長）
- 4月24日 センター長会議（センター長）

#### 5月

- 5月29日 JAXA バンコク駐在員事務所 斉藤所長来訪（センター長、副センター長）

#### 6月

- 6月2日 東京大学北京代表所福井浩一代表来訪（副センター長）
- 6月4日 ARAT 同窓会会長 Dr. Busaba 訪問（センター長、副センター長）
- 6月5日 アジア科学教育経済発展機構 河井栄一氏、国際協力銀行 森本氏来訪
- 6月6日 NRCT 訪問・打ち合わせ（センター長）
- 6月7日 京都大学東南アジア研究所バンコク連絡事務所訪問  
（センター長、副センター長）
- 6月19日 MEXT 高等教育局高等教育企画課氷見谷国際企画室長/国立教育政策研究所深堀総括  
研究官/石丸書記官来訪（センター長、副センター長）
- 6月20日 第1回科学技術連絡会出席（於：日本大使館）（センター長）  
マヒドン大学インターナショナルディ出席（センター長、副センター長）
- 6月24日 石丸書記官打ち合わせ（センター長、副センター長）
- 6月25日 チュラロンコン大学 JSPS 事業経験者訪問（センター長、副センター長）  
オフィスビル火災訓練参加
- 6月26日 京都大学東南アジア研究所バンコク連絡事務所訪問  
（センター長、副センター長）
- 6月27日 新美次席公使・石丸書記官会食（新美公使送別会）（センター長、副センター長）  
シーナカリンウィロート大学 JSPS 事業経験者訪問  
（センター長、副センター長）
- 6月30日 東海大学石川准教授・東京大学農学生命科学研究科 堀特別研究員来訪  
（センター長）  
日本留学経験者（Dr.Wiwat Wongwarawipat）訪問（副センター長）

---

---

#### 日本学術振興会バンコク研究連絡センター / JSPS Bangkok Office

113 TWY Office Center, 10th Fl. Serm-mit Tower

159 Sukumvit Soi 21, Bangkok 10110 Tel: +66-2-661-6453 Fax: +66-2-661-6454